

跡見を去るに際して

福 部 信 敏

非常勤講師として三年、専任の教師として二八年……およそ三〇年を跡見学園女子大学に勤務させていたのだいこととなる。これまでここ以外の職場を経験したことがない小生にとつて、どこに行こうと、それはほんの数年のことで、跡見は小生の人生そのものであることに変わりはない。こんな小生のような人間にこんな素晴らしい職場を与えて下さったことに対し、跡見学園に、そしてまた、いまはここを去られた方々を含めて、教員、職員の皆様に心よりお礼申し上げなければならぬ。

さて、跡見を去る言葉を探しているうちに、不思議なことに気がついた。教壇に立ち始めた最初の頃の数年がことのほか想い出されてくるのである。老人性の回顧趣味かと自ら苦笑してみるものの、一概にそうともいえないところがどこかにある。

跡見学園女子大学の二つ目の学科「美学美術史学科」をいわば創設された(と小生は思い込んでいるのだが)、あの今泉篤男、藤田経世両先生がまだかくしゃくとしておられた頃だった。今泉先生は常に黒いスーツを着た、まさにパリ帰りの紳士だった。娘を連れて幾度か等々力の、庭に太い樺の木が何本もある西洋館に遊びに行ったことがある。小生などは娘共々孫のように思われていたのだろう。藤田先生も一ドル数円の時代に優雅な欧米旅行をされたときのことを常になつかしそうに語るやさしい方だった。しかし小生はこれら両先生のうちにものに拘泥しない、気宇壮大な明治の男を見たように思う。以来この種の人間にあまり出会ったことがない。美学美術史学科に一切の上下関係がなく、小生のような者がたいして苦勞もせずに三〇年過ごせたのも、両先生が育まれた隠れた伝統のお陰だと思つて



さったのだが、まさに明治は遠くなつてしまつた。

学生さんたちのことを一番先に書き、一番先に感謝しなければならなかつた。初めて教壇に立つたとき、いきなり「起立、礼、ごきげんよう」とやられたものだから、その後遺症からいまだに脱け出せず、窓の方を向いて講義する習慣は生涯のものになつてしまつた。いまの学生さんたちと比較するつもりはないのだが、当時の学生さんには、目を輝かせて、友達と目くばせしながら先生を困らせるような「ちゃめつ気」があつたように思う。良し悪しはともかく、いまはみんながなんとなくクールになつてしまつたように思われてならない。

次々に先生方や職員の方々、そして多数の学生さんたちの顔が現われては消えていく。そんな想いの中で去つてい

いる。毎年年賀状代りに長い電話をする習慣になつていた藤田先生の奥様節子様も数年前にお亡くなりになつてしまつた。平塚の古い洋館に遊びに行つた折にはよく娘を可愛がつて下

かねばならない。この文を一つの言葉で終わらせるとすれば、やはり「ありがとう」しかないのである。